

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：22702

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10912

研究課題名（和文）看護基礎教育における糖尿病の【語り】をいかしたセルフマネジメント支援教材の開発

研究課題名（英文）Development of Self-Management Support Materials Utilizing Narratives of Diabetes in Nursing Education

研究代表者

高橋 奈津子（Takahashi, Natsuko）

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：10328180

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、看護基礎教育課程にある看護学生が糖尿病患者の療養生活の実態を当事者の語りから理解し、多様なセルフマネジメント支援を考えることのできる教材を開発することを目的とし、2型糖尿病患者30名にビデオインタビューを実施した。30代で2型糖尿病を発症した女性1名のインタビュー映像を発症時から現在までのストーリーがテーマごとに伝わるよう再構成した約30分の映像教材を作成した。今後は30名のインタビューの語りからセルフマネジメント支援に必要なテーマを分析し、テーマごとに複数の人の語り動画が閲覧できる教材を作成する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

糖尿病、生活習慣病という名称が当事者にとって偏見や不利益を被る可能性があり、療養に影響する面が大きいという語りから、スティグマを低減するためのセルフマネジメント支援、糖尿病患者に対するアドボケイトについて考える教材となる。合併症がない場合は、自覚症状がほとんどないため病気という気がしないという語りも多いが、一旦、合併症が生じると療養生活は複雑となる語りが多い。そのため、糖尿病の病態の複雑さ、多様さについてリアルにとらえることができる教材であり、医療者のみならず、一般市民に対しても糖尿病の発症予防、重症化予防の啓発教材として活用できると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop educational materials for nursing students in the basic nursing education course to understand the reality of medical treatment life of diabetic patients from their own stories and to consider various self-management supports. The interview video of one woman who developed type 2 diabetes in her 30s was reconstructed to convey the story from the onset of the disease to the present day in a thematic manner, and a 30-minute video teaching material was created. In the future, we will analyze the themes necessary for self-management support from the narratives of the 30 interviewees, and create educational materials in which the narratives of multiple people can be viewed for each theme.

研究分野：慢性看護 がん看護

キーワード：糖尿病 語り 体験 セルフマネジメント 看護基礎教育 教材

## 1. 研究開始当初の背景

日本において糖尿病の総患者数は、約 316 万 6000 人と推定されており(患者調査,2016)、糖尿病治療の進歩にも関わらず糖尿病患者は増加の一途を辿っている。さらに治療の中断や放置による糖尿病の進行は、3 大合併症や大血管障害を引き起こし、患者の QOL を著しく低下させる。糖尿病の治療に関し、厳密な血糖コントロールをめざした強化インスリン療法は低血糖リスクがあること(UKPDS33,1998)、罹病期間の長いコントロール不良の 2 型糖尿病には厳格なコントロールによる治療効果は認められない(VADT, 2009)との報告がなされた。その後、日本でも年齢、罹病期間、臓器障害、低血糖のリスク、サポート体制を考慮した個別のコントロール目標の設定が強調されるようになった(日本糖尿病協会, 2013)。そして糖尿病の重症化予防が大きな課題とされ、健康人と変わらない生活の質を保ち、健康人と変わらない寿命を全うすること(糖尿病診療ガイド, 2016)を治療目標とし、糖尿病と共にその人らしく生き抜くため、より個別性を考慮した治療やセルフマネジメント支援が求められている。

上記の目標達成には、その時々々の健康状態に合わせて生活を調整するなど患者によるセルフマネジメントが不可欠である(LorigK, 2006)。慢性期看護分野におけるセルフマネジメントの概念分析によると、慢性疾患のセルフマネジメントは、慢性疾患とともに生きるために生じた課題や困難に主体的に取り組み、状況に合わせた自分なりの対処方法を体得していく変化・成長のプロセスであり、医療者と患者のパートナーシップが重要であるという(浅井ら, 2017)。しかし、糖尿病が多様性をもった生活習慣を基盤として成立しているという視点から、長い闘病生活に着目し、どのように生活を調整し病気に対処しているのかを明らかにしたものはほとんどない(野並, 2016)。

疾病構造、医療情勢の変化に伴い看護基礎教育において糖尿病をはじめとする慢性疾患と共に生きる人の看護をいかに教授するかが課題となっている。糖尿病患者の多くは、診断後は自らの生活習慣を省み、合併症の発症や進行という脅威との距離を押し量りつつ、自覚症状が乏しいとされる身体と血糖値という客観的な指標に向き合い、自分なりのセルフマネジメントを生活に組み込み、糖尿病と共に生きていくと考えられる。しかし看護学生にとって外来診療を主とする糖尿病患者の診断時から生涯にわたるセルフマネジメントの実態はイメージ化しにくい。セルフマネジメント支援においては、まず患者の状況を生活者という視点をふまえて理解することが必要である。そこで、当事者の多様な語りを映像で視聴できる教材により、看護基礎教育にある学生も糖尿病患者の診断時から現在に至るまでの身体や検査値のとらえ方、思い、行動、価値観、生活を含め、長期にわたるセルフマネジメントの変容のプロセスの多様性を理解し、個別性を反映したセルフマネジメント支援について検討できると考える。

## 2. 研究の目的

看護基礎教育課程にある看護学生が糖尿病患者の療養生活の実態を当事者の語りから理解し、多様なセルフマネジメント支援を考えることのできる教材を開発することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン

英国オックスフォード大学の Health Experience Research Group(HERG)が開発した患者体験のインタビューをデータベース化する質的研究。

### (2) 研究対象者

機縁法にて 2 型糖尿病と診断され、3 年以上経過しており、現在、外来通院している 20 歳以上の方で、研究の趣旨を理解し、研究協力の同意が得られた方 30 名。

### (3) データ収集方法

インタビューは、インタビューガイドに基づき、診断時から現在に至るまでの症状や治療などの経過、日常生活で気をつけていることや工夫、気持ちのこと、周囲の人、医療者との関係などが自由に十分語れるように傾聴した。インタビューの方法として研究開始当初は、対面でのビデオインタビューのみを予定していたが、covid-19 の影響により、リモートインタビューと対面でのインタビューを研究協力者の状況にあわせて実施した。

### (4) データ分析方法

インタビューデータは、守秘義務誓約書を締結したテープ起こし業者に依頼し、逐語録を作成する。インタビューデータを匿名化し、インタビュー参加者の削除希望部分を除いて、映像・音声・テキストファイルとしてデータ保存する。質的データソフトを用い、データをコーディングし、セルフマネジメント(食事、運動・薬物療法、ストレスなど)に関する特徴的な内容を抽出する。上記の多様な語りのうち、特に看護学生向けの教材となる語りを文献、研究者間、専門職者と検討し選出する。コード化した 3 分程度のセルフマネジメントに関する語りの映像・音声・テキストを選出し、研究参加者のプロフィールとあわせ、セルフマネジメントに関する体験の構造(治療、経過、出来事など)ごとに対象者の多様な語りを数名分まとめる。また特に豊富な語りが見られ、その語りが看護基礎教育に適していると考えられる対象者に

については経過やストーリーが分かるように15分～20分程度に編集した教材を作成する。  
本研究は、聖路加国際大学、神奈川県立保健福祉大学の倫理審査委員会で承認をえて実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究対象者

2型糖尿病患者30名にビデオインタビュー（対面またはリモート）を実施した。

対象者は男性17名（56.7%）、女性13名（43.3%）、年齢層は30代～80代、発症年齢も10代～60代と幅広く、平均年齢は60.6歳、診断時からの期間は3年～30年であった。合併症は、網膜症、足病変（切断2名）、心疾患、脳梗塞、慢性腎不全（透析5名）などであり、既往歴も潰瘍性大腸炎、うつ病、アトピー性皮膚炎など多様であった。

##### (2) 結果

本研究は、Covid-19の緊急事態宣言により、インタビューは一時期中断せざるをえなくなった。対面インタビューからリモートインタビューへの切り替えが必要となり、リモートインタビューの方法の修得、研究計画の変更などに時間を要した。

日本における糖尿病患者のセルフマネジメントに関する研究の動向について文献検討を実施しインスリン自己注射、自己血糖測定の体験学習のみならず、診断時から現在に至るまでの身体や検査値のとらえ方、思い、行動、価値観、生活を含め、長期にわたるセルフマネジメントの変容のプロセスの多様性、個別性を看護学生がリアルに理解できるような教材開発が必要であるという示唆を得た。

30代で2型糖尿病を発症した女性1名のインタビュー映像を発症時から現在までのストーリーがテーマごとに伝わるよう再構成した映像教材試作版を作成した。第17回日本慢性看護学会学術集会の交流集会で作成した動画教材を一部紹介し、看護基礎教育において学生が糖尿病患者のセルフマネジメント支援について考えを深める教材として、どのような視点で活用可能であるか、どのような問いを設定すればよいかなど検討し、「糖尿病の語り-若年で2型糖尿病と診断されたAさんの語り」と題した約30分の動画を作成した。動画は、Aさんの診断から現在までの約12年の経過を診断されてから治療中断に至るPART1と自分なりに糖尿病とつきあう術を獲得していく経過のPART2の2部構成とし、ストーリーがテーマごとに伝わるよう再構成した。授業で活用したところ、慢性病とともに生きる人の特徴、慢性病とともに生きる上で必要なこと、看護師に求められること、チーム医療、医療体制等について多岐な学びが得られていた。

30名のデータは分析途上であるが、糖尿病、生活習慣病という名称が当事者にとって偏見や不利益を被る可能性があり、療養に影響する面が大きいという指摘もあった。合併症がない場合は、自覚症状はほとんどなく生活に支障もないため病気という気がしないという語りも多い。半面、特に足の切断、糖尿病性腎症から透析導入となった方は、治療による生活への支障も大きくなり、透析治療による合併症にも注意する必要があり療養生活は複雑となっていた。長期の療養生活においては、食事についての試行錯誤の時期があり、時に極端な糖質制限など食事が影響し合併症の発症につながっていたケースもあった。食事、運動、周囲の人との付き合い方、合併症予防、対応などについては個々自分の生活に合わせた工夫を模索している様が語られており多様性があった。今後は、30名のインタビューの語りからセルフマネジメント支援に必要なテーマをさらに分析し、テーマごとに複数の人の語り動画が閲覧できる教材を作成すると共に5名程度の人のストーリーが経時的にテーマごとに伝わる動画もあわせて作成していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋奈津子、佐藤幹代、中山直子、米田昭子
2. 発表標題 看護基礎教育における糖尿病の語りをいかしたセルフマネジメント支援教材の開発
3. 学会等名 第16回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山直子 高橋奈津子 佐藤幹代 米田昭子
2. 発表標題 糖尿病患者のセルフマネジメントに関する研究の動向と看護基礎教育課程における教材開発への示唆
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森田夏実 射場典子 佐藤幹代 瀬戸山陽子 和田恵美子 高橋奈津子 竹内登美子 横井郁子 原田雅義 いたう武彦
2. 発表標題 健康と病いの語りから何を学ぶか 当事者が語る様々な意思決定
3. 学会等名 日本看護学教育学会第30回学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 健康と病いの語りディベックスジャパン	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 166
3. 書名 患者の語りと医療者教育 - 映像と言葉が伝える当事者の経験	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 幹代  (Sato Mikiyo)  (00328163)	自治医科大学・看護学部・准教授   (32202)	
研究分担者	中山 直子  (Nakayama Naoko)  (50510244)	神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・准教授   (22702)	
研究分担者	米田 昭子  (Yoneda Akiko)  (70709732)	山梨県立大学・看護学部・教授   (23503)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------